

本当の教えに出会うことは「生きる」ことから、「生かされる」ことへの大転換

無碍の一道 第47号

発行:2016年5月2日
発行者:浄土真宗本願寺派 長尾山 天龍寺
〒739-0147 副住職 天野英昭
東広島市八本松西6丁目10番1号
☎・FAX 082-428-0160・082-428-1360

宗祖親鸞聖人降誕会法座

日時 5月19日(木) 9:00~15:00頃

朝席 9:00~ 昼席 13:00~

ご講師 清胤 祐子 師(安芸太田町 正覚寺坊守)



第54回歎異抄輪読会

日時 5月19日(木) 19:00~20:30頃

ご講師 松田正典先生(広島大学名誉教授)

費用 500円

参加者 天龍寺の門信徒の方のみならず、どなたでも参加は自由です

※ お詫び

宗祖親鸞聖人降誕会法座と歎異抄輪読会の日が重なりました。どちらにもご参加を頂いておられます方々には、大変お忙しい中 2回に渡り足をお運びいただきますこと、書面をお借りしましてお詫び申し上げます。

★天龍寺仏教壮年会 月例会

5月31日(火) 19:00~20:30

裏山のひのきの枝うちをいただいております。

先月から天龍寺仏教壮年会のみなさまのお力添えにより、裏山のひのきの枝うちをしていただいております。数年前になります、裏山の木を伐採して頂き、その伐採した木にシイタケ菌等をうえていただき、昨年からはシイタケ等が生えてきており、時にみなさまと一緒に食する機会をいただいております。

共に汗を流し、色々と冗談などを言いながら様々な事を共有させていただいており、ありがたいご縁をいただいていると思っております。これからもみなさまと色々な事を共有させていただくご縁を大切にさせていただければと思います。





天龍寺仏教婦人会法座並びに演奏会のお礼

先月の4月10日(日)には天龍寺仏教婦人会法座並びに演奏会がありました。大変お忙しい中、多数のご参詣をいただきましたこと、お礼を申し上げます。

今年は、藤本宏平君(ピアノ)にお願いをしましたところ、正田圭吾君(サクソ)・野々村彩乃さん(声楽)が来てくれることになりました。3人とも才能にあふれた卒業生で、当山で演奏をしてくれたあとに、音楽の素養のない私が、偉そうにさすがだなと思ったことであります。

野々村彩乃さんが来てくれたらTVの「カラオケバトルに出ろ。」とこの件も偉そうに言おうと思っておりました。そして彼女に「カラオケバトルに出ろ。」と言いましたところ、彼女曰く「すでにオファーを3回もらったのだけれども日程が合わず参加しなかった。」とのことでした。

全日本学生音楽コンクールで高校・大学で1位を取ったわけですからオファーが来るのは当然と言えば当然だと実感したことです。

日程が合えば、今後TVのカラオケバトルで彼女の歌を聞くことができるかもしれません。彼女は当山にすでに3回来てくれました。ご存じの方も多と思います。今後とも彼女に限らず、応援をいただければありがたいと存じます。

最後に、この度の法座を実施するにあたり、少し人数が少ない中、天龍寺仏教婦人会の方々には大変ご尽力を賜りました事厚くお礼を申し上げ、さらに昨年同様に天龍寺仏教壮年会のみなさまにも大変ご尽力をいただきましたこと、この件も書面をお借りしまして厚くお礼を申し上げます。

近頃しみじみ感じるところです。



この境涯は本当に自分の思い通りにならず、ある先生のお言葉をお借りしますと「どうしようも出来ない境涯」と書いておられました。私も58歳になり、あと2年で還暦を迎える歳になりますと、偉そうな事は申せませんが、私なりに実感するところでもあります。

また、日々出遭うご縁は自分の意にそわない・願わない事が多く、仮に意に沿ったご縁をいただいても、しばらくしますと様々な苦しみ・悩み等が生じてくると思う事もあります。

昭和の覚者と言われました、森信三先生がご本の中で、『「天」は、つねにわれわれ人間の恣意を超えた所に導き給うとの信念に従って生きるほかないであろう』と書いておられました。

先般の寺報にも書かせて頂きましたが、渡邊和子先生のお言葉ではありませんが、「置かれたところで咲きなさい。」この事を仏教では『随縁』すなわち縁に従って生きて行くという考えです。自分がいくら努力・尽力を尽くしても与えられるご縁は、様々でそのご縁に従って生きていくことが大切なことかもしれません。

当山で毎月勉強会をさせていただいておりますが、その時に先生が、「悲しくても南無阿弥陀仏、楽しくても南無阿弥陀仏、なににもなくても南無阿弥陀仏」と言われます。

先人の安芸門徒の方々同様に手を合わせながら、大きな悲しみは悲しみのまま、苦しみは苦しみのまま、そのままのお姿で、この境涯で様々な物に翻弄されながら、時には不平・不満・愚痴を言いながら、一方で苦しみ・悩み等に会い、さらに時に大きな悲しみ出遭いながら、南無阿弥陀仏と共に、この生死の苦海を渡らさせていただければ幸いだと思うところでもございます。

しかし、現実の私には、とても難しい事です。ただ、歎異抄の第2条の中の「ただ念仏して、弥陀にたすけまいらすべしと、よきひとの仰せをかぶりて、信じるほかに別の子細なきなり。」の言葉ではありませんが、重なりますが、私なりにこの一度の娑婆の人生、親鸞聖人のお言葉をお借りしますと「苦海」「難渡海」を南無阿弥陀仏と共に不平・不満を言いながら、悩み・苦しみを抱えながら、時に大きな悲しみ出遭いながら、私なりに歩むことができればと思っております。